



銀華亭女将

あまがわ

天川 ふくさん

Profile

1923年多野郡美九里村(現藤岡市)生まれ。1965年に旧鬼石町にラーメン店「銀華亭」をオープンし、60年以上厨房に立ち続けている。今年2月で103歳を迎えた。

ロングランな人生、笑顔で上映中

103歳になっても働いているとは思ってもいなかった」と快活に笑うふくさん。夫と始めたラーメン店「銀華亭」を鬼石の町で守り続けて60年、体力の許す限り厨房に立ち続けています。

実家は養蚕学校の分教場で、父親にはよく可愛がってもらっていたというふくさん。藤岡高等女学校を卒業後はバス会社に勤め、終戦から4年後の1949年に結婚して鬼石へやってきました。夫の家

は「銀映座」という映画館を営んでいて、「毎日映画が見られるなんていいかな、なんて思っていたの。一人で東京へ観に行くくらい大好きだったから。だけどとんでもない！大忙しの毎日でした」と振り返ります。

そんな中、徐々にテレビが一般家庭にも普及し、映画の人气が低迷。映画館を閉め、飲食店を開くことを考えます。「私が知り合いのお店に修行に行つて、ラーメンと餃子なら、と思つて半年習いました。料理が得意じゃなかったのとあけすけに笑います。お店の名前はふくさんが命名したそうで、

銀映座の「映」を中華の「華」に変えて「銀華亭」。映画館のころからの顔見知りかひっきりなしに訪れて繁盛しました。60年間続けてこられた原動力を尋ねると、「生活のためと、楽しかったから、その両方かな。やりたいことがあつて、体力もある。この歳になつてまで働けるのはすごく幸せなことですね」と語ってくれました。

「私は運が良いし、周りにいい人ばかり集まるの」と話すふくさん。夫が亡くなり閉店を考えた時には、息子がお店の継承を買って出してくれました。「元気に働くおばあちゃん」としてメディアにも頻繁に取り上げられるようになり、遠方からのお客さんも後を絶ちません。「人の悪いことはしない。これが私の信条なの。そうやって生きてきたご褒美を、今貰っているのかな」と目を細めます。

山あり谷ありの103年。小柄な体でその歴史を背負いながら、苦労を吹き飛ばす太陽のような明るさと笑顔で、日本中に元氣と勇氣を届けています。